

# 曹洞宗における再吟文献の研究

安 藤 嘉 則

## 一、はじめに

今日、洞門抄物といわれる膨大な中世曹洞宗の典籍群の中に、再吟<sup>※</sup>といわれる一群の文献が多数残されている。この再吟なる典籍は、独特の古則拈提方法を共通に有しており、中世洞門の古則の捉え方を理解する上で、貴重な資料であると思われる。ただ、それらの撰述年代の分布を見る限り、中世というよりは、そのほとんどが近世初頭に集中しており、その位置づけ方も問題となろうが、以下に検討するように宗学的に見てやはり中世曹洞禅の枠組みの中で考えるべきであり、洞門抄物の中では後期（あるいは末期）の文献として位置づけられるであろう。

これまでこの再吟文献については、特に『大淵和尚再吟』について、岡田宜法氏によって言及、考察されていたのであるが、この再吟が本格的に取り上げられるようになったのは、むしろ国語学における中世東国語研究からのアプローチによるところが大きかったと思われる。特に昭和五〇年前後における金田弘氏の再吟研究と駒澤大学文学部国

文学研究室編『禅門抄物叢刊』による再吟文献（五点）の影印刊行（解題研究も含む）は大きく再吟研究を進展させたといえるであろう。さらには近年樋渡登氏によってさらに再吟文献の成立問題等について新たな見解が示されている。

尚、こうした再吟文献に関する従来の諸研究の成果を示すならば、以下のごとくである。

### 〈再吟の研究〉

一、岡田宜法、『日本禅籍史論』（昭和一八年）上、二四四頁、『大淵和尚再吟』が「第四篇 江戸時代に於ける禅籍概観」の中の「第三章 宗統復古運動決意以前の宗典（江戸建幕以後、寛文初年に至る概観）」の中で言及されている。

二、金田弘、『火堯和尚再吟攷』、『今泉博士古稀記念国語学論叢』（昭和四八年）所収、本論文は「火堯和尚再吟」考」として『洞門抄物と国語研究』（昭和五一年）に再録。

三、鏡島元隆、『大淵和尚再吟』解題、駒澤大学文学部国文学研究室編『禪門抄物叢刊』第三の『大淵和尚再吟』（昭和四九年）に所収。

四、酒井得元、『碧巖集再吟』『火堯和尚再吟』解題、駒澤大学文学部国文学研究室編『禪門抄物叢刊』第十・第十一・第二の『永平元禪師語録抄・碧巖集再吟・火堯和尚再吟』（昭和五一年）に所収。

五、鏡島元隆、『扶桑再吟』解題、駒澤大学文学部国文学研究室編『禪門抄物叢刊』第十三の『扶桑再吟』（昭和五一年）に所収。

六、桜井秀雄、『鉄外和尚代抄』『鉄外和尚再吟』解題、駒澤大学文学部国文学研究室編『禪門抄物叢刊』第十四・第十五の『鉄外和尚代抄・鉄外和尚再吟』（昭和五一年）に所収。

七、樋渡登、『洞門抄物における「再吟」の性格』、『駒澤大学禅研究所年報』第一号、平成二年

八、樋渡登、『洞門抄物における「再吟」の性格追考』、『都留文科大学国文学論考』第二十七号、平成三年

九、樋渡登、『洞門抄物『天南和尚再吟』について』、『日本近代語研究』一、平成三年

ところでこのような国語学からの再吟に関する重要な研究成果がみられる一方で、中世曹洞禅におけるこの再吟文献の捉え方、位置づけ方について、未だ不明な点も多いのではないか、と思われるのであり、本稿ではその形態論や本則の出典の問題、あるいは再吟説示の前提となるべき叢林行事の問題などを通して、再吟文献の撰述目的、ひいて

は中世曹洞宗文献におけるその位置づけについて、検討する次第である。<sup>②</sup>

## 二、再吟文献のリストについて

そこですでに現在知られている再吟文献について筆者が知る限りの典籍について以下に提示しよう。ただし再吟集には、撰述者が不明な場合や、再吟の一部しか知れない場合もあるので、まず【一】撰述者が知られ、まとまった形の再吟が伝えられる場合、【二】撰述者不明の再吟の場合、【三】部分的に伝えられる再吟、の三つに分けてみることにする。

### 【一】撰述者が明確である再吟集

〈天南松薫（？）一六四〇 大中寺一三世〉の再吟集

①「天南和尚再吟」、写本、一巻一冊、愛知県西明寺蔵、月峰薫補（西明寺一一世）補筆、本則は一六四則、『曹洞宗宗宝調査目録解題集』1 東海管区編の一一二頁に「本則注」として紹介される典籍。樋渡登氏、前掲論文九にも紹介される。

②「天南和尚再吟」、写本、一巻一冊、西明寺蔵、本則は二二五則、『曹洞宗宗宝調査目録解題集』1 東海管区編の一一二頁に「本則書」として紹介される典籍。樋渡登氏、前掲論文九にも紹介される。

③「天南和尚再吟」、写本、一巻一冊、西明寺蔵、樋渡登氏前掲論文九に紹介される典籍。

〈勝国良尊（？）一六四〇 総寧寺一八世〉の再吟集

①『勝国和尚再吟』、刊本、六卷、五卷までの有欠本が土井洋一氏によ

って所蔵され、同氏によって翻刻されている。（『勝国和尚再吟』

攷 学習院大学文学部研究年報 第一五―一七輯）

〈大淵文刹（？―一六三六 総寧寺一九世）の再吟集〉

①『大淵和尚再吟』、刊本、三卷三冊、万治二年刊行、本書は駒澤大学文学部国文学研究室編『禪門抄物叢刊』第三の『大淵和尚再吟』として昭和四九年に影印刊行されている。

②『禪道文刹（外題）』、写本、駒澤大学図書館蔵、一冊、奥書に「元禄十一戌寅曆 雲州杵築 神光寺衆寮淵竜」とある。本書も①の刊本とともに『禪門抄物叢刊』第三において影印刊行されている。なお『新纂禅籍目録』では、「禅林類聚文刹鈔」としている。

〈扶桑大嗽（一六四五 孝顕寺一二世 \*ただし現在の孝顕寺の世代では十四世）の再吟集〉

①『扶桑再吟』、刊本、四卷四冊、刊記「承応三午陽春吉日 中野市右衛門判行」、本書は駒澤大学文学部国文学研究室編の『禪門抄物叢刊』第十三として影印刊行されている。

②『扶桑和尚再吟』、写本、小田原市香林寺蔵、曹洞宗文化財調査委員会による解題目録の一二「大機和尚再吟」として題されている文献の一部（二七丁分）。本書の表紙裏に「香林寺先師 大機和尚 再吟 不審 扶桑和尚再吟」とある

〈大機是尊（？―？ 香林寺一一世）の再吟集〉

①『大機和尚再吟』、写本、小田原市香林寺蔵、曹洞宗文化財調査委員会による解題目録の一二「大機和尚再吟」として題されている文

献の一部に所収。

〈大休善遊（？―一六六六 円通寺「むつ市田名部」六世）の再吟集〉

①『碧巖集再吟』、刊本、五卷一冊、刊記には「明暦三年 丁酉 歳開端日 住東奥南部吉祥山圓通大休禪師再吟終 老師遷化後兄第二三子記取這箇吟話以令寛文中開版畢 碧巖再吟巻語終 河村利兵衛板行」とある。本書は駒澤大学文学部国文学研究室編『禪門抄物叢刊』第十一『碧巖集再吟』として昭和五一年に影印刊行されている。

〈大川梵益（？―一六七〇 愛知県竜祐寺一五世）の再吟集〉

①『溢益和尚再吟』、写本、一冊五三丁（樋渡登氏、七の前稿、参照）  
〈鉄外香鸞（一五九二―一六七九 大中寺一七世）の再吟集〉

①『鉄外和尚再吟』、刊本、上下二巻、刊記はナシ、本書は駒澤大学文学部国文学研究室編『禪門抄物叢刊』第十五として『鉄外和尚再吟』として昭和五一年に影印刊行されている。

【二】撰述者不明の再吟文献

①『火堯和尚再吟』、写本、駒澤大学図書館蔵、一冊、五六丁、後補の題簽に「火堯和尚再吟 万治二年 写本」とある。（金田弘、前掲論文、参照）火堯和尚については、不明である。

②『西明寺再吟』（仮題）、写本、西明寺蔵、一冊四一丁、樋渡登氏の七の前掲論文、一二八頁によると、梅船和尚、鼓岩頼猷和尚の名が見えるようである。

③『西明寺再吟』（仮題）、写本、西明寺蔵、一冊三七丁、（樋渡登氏、七の前掲論文、参照）

④「大広寺再吟」(仮題)、写本、大広寺(大阪府池田市)蔵、曹洞宗文化財調査委員会の「調査目録及び解題」No.一五八、『曹洞宗報』平成七年六月号の大広寺典籍の二七番として紹介される典籍。最初の本則に「寒鐵和尚破云」とあるが、今のところ撰述者については確認できない。

⑤『無門関四十六則出逢』、写本、埼玉県小川町西光寺蔵、『無門関』を再吟形式に準じた形で拈提したもの。

### 【三】部分的な再吟が伝えられる場合

①自然玄悦(??一五八九 双林寺一一世)

本則「臨濟四喝」頌「不明」『火堯和尚再吟』(四四四頁)

②訳山銀鎖(??一六〇九 双林寺一二世)

本則「瀉山靈泉問答」頌「丹霞淳頌」『火堯和尚再吟』(四四九頁)

③韓嶺良雄(??一六一五 大中寺一〇世)

本則「黄檗檀槽漢」頌「佛惠泉頌」『火堯和尚再吟』(四三七頁)

④門庵宗關(??一六二一 大中寺一二世)

本則「二僧捲簾」頌「正堂弁頌」『火堯和尚再吟』(四三五頁)

⑤洞谷泉竜(?? 竜穩寺一七世)

本則「迦葉刹竿」頌「旻古佛」『火堯和尚再吟』(四五二頁)

⑥洲珊嶺渚(?? 竜穩寺一八世)

本則「万法不侶」頌「??頌」『火堯和尚再吟』(四五五頁)

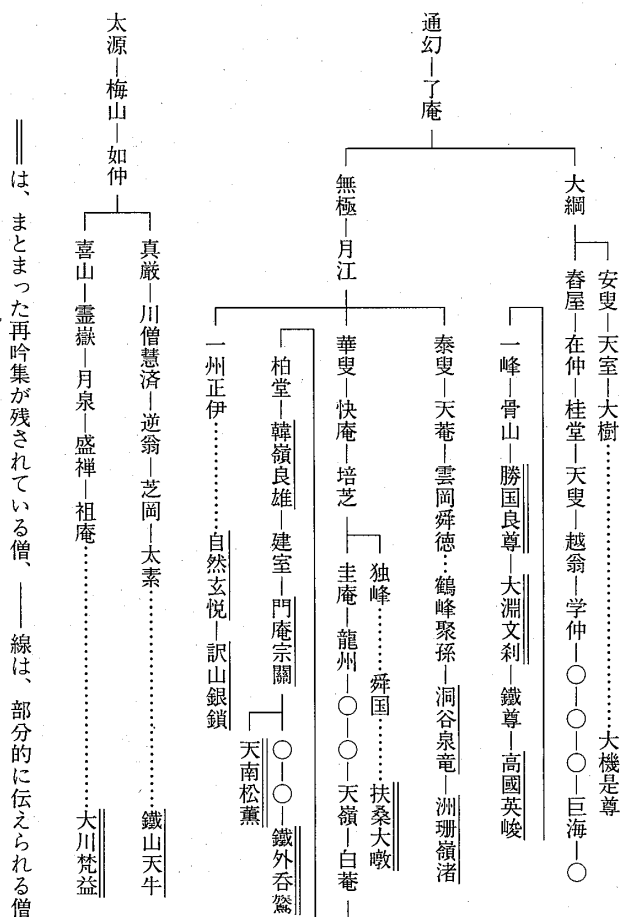
⑦高国英峻(??一六七四 総寧寺二一世)

本則「麻谷兩錫話」頌「圓悟勤頌」香林寺所蔵の前出の再吟に所収

⑧鉄山天牛(??一六五四 西明寺七世)

再吟八則、『鉄山牛和尚下語』(写本、西明寺蔵)に所収

この他にも多くの再吟文献が見出されるところであるが、管見による限りでの再吟文献の撰述者について法系図を作成するならば、左記のごとくである。



さて以上のごとく再吟の典籍群と撰述者の系譜についてみたのであるが、これを以前に考察した代語文献とその撰述者の系譜によって比較するならば、再吟文献の撰述者の法系は代語文献を残した法系と基本的に重なることが理解されるであろう。例えば、再吟が刊本化され

た大淵・勝国・鉄外にはその代語集、または代語抄が同じく刊行され、また天南や部分的な再吟が伝えられる門庵・高国なども、その代語集が知られている。

さらに愛知県西明寺にも『天南和尚再吟』の他に、太原派の法系を嗣いだ和尚たちの再吟集もいくつか伝えられており、注目されるところである。しかしこの西明寺の再吟類は、すでに代語文献の考察において、西明寺の代語集（特に一世鉄山天牛の場合など）や門参類における快庵派の影響を見たように、この太原派の再吟も快庵派の影響下にあったとみてよいであろう。したがって再吟文献の撰述は基本的には了庵派が中心であり、無極下の諸派（特に快庵派・一州派）と大綱派下の在仲派・安叟派などに限定されていたようである。また特に代語文献の場合のような、石屋派や天真派にまでの広がりは今のところ確認できない。

またこれらの再吟集を撰述した諸派は主に関東を中心にして展開した門派であること、また時期的には戦国期から江戸初頭にかけての撰述がほとんどであって、中世室町期のものはほとんど見い出せないことも、代語集や門参などの撰述時期と比べて特徴的であるといえるであろう。

### 三、再吟の拈提形式について

次に再吟文献におけるその形態論的特質を考察し、そこから「再吟」なる概念の意味内容についても言及してみたい。

再吟文献の個々の再吟、または説破はその基本的な古則拈提形式は

ある程度共通の形式を有している。これまでの諸研究ですでに明らかのようにその形式は「1、古則 2、頌 3、破云…… 4、引句 5、私云……、再吟云……」という五段階に分類されているが、これが再吟の基本的な形式であると思われる。ただ樋渡登氏が、前稿七において、さらに『大淵和尚再吟』の主要な形式と『鉄外和尚再吟』に多く見い出せる形式の両方を分け、より細分化された形式を提示されているように、再吟の形式は単一的なものではなく、いくつかのパターンが見出されるのである。

筆者はこうした先学の諸研究を参照しながら、以下のごとく再吟の古則拈提形式を整理してみたい。

【I類】本則＋頌古＋説破（引句）＋私云「本則の抄＋頌の抄＋説破の抄」

①本則……表題のみ

②頌……頌を全文掲載する場合と、禅僧名のみの場合とがある

③説破……「破云」または「○○和尚破云」で始まる。古人の頌をふまえ、さらに古則を拈提、引句を含む

④抄（前三者の解説）

イ、本則の抄……「本則ハ」「當則ハ」——本則の内容解説

ロ、頌の抄……「頌ハ」「頌意ハ」「頌モ」——頌古の解説

ハ、説破の抄……「再吟ハ」「法門ハ」「説破ハ」「破ハ」

——説破の解説

#### 〈具体例〉

投子威音前一箭 類九

丹霞淳頌云

珊瑚枝上玉花開、風通清香遍九垓、勿謂乾坤成委曲、韶陽曾見睦州來

大淵和尚破云、丙重ノ山射透ト云ガ此話ノ究竟ダ、國父國母ノ惠ミヲ御受ケ無イ一天ノ主ジナ郎ニハ、珊瑚一垓臣僚輔弼ノ底モユ、シウナウテハ、丹霞淳ハ、勿謂一來、他派下ノ傳來ニモ何レカ此ノ德ヲ仰ガザラン

引テ句云、皇天無親、惟德是輔 普灯ニ在之

私云、當則ハ、六祖道底内紹門裡鉅斧住山ヨリ唱エ出レタ公案ダ、此僧モ、師唱一曲、宗風一誰、洞濟ノ兩家ヲ含ンデノ一問ダ、御答話モ威音前ノ一箭ト云ハ門裡向上不出ノ主ノ一ダ、佛々祖々今日投子青ニ至ル迄デ、此ノ主ニ紹イデ陰陽洞濟ニ便ラヌ時ガ兩重ノ山射透ダ、爰ヲ佛頂上ノ一圓、誰ソノ本居内紹門裡ノ相續ト云タ、サテ陰陽洞濟傳不傳ノ問ハ、皆ナ射得底ヨ、本則ノ末ハ太陽ニ傳底ノ首尾ノ合セ羊ダ、將拂子、敲禪床、爰カ別傳一機、以心傳心ノ旨タ

頌意ハ、一ノ句ハ、珊瑚枝上ト云ハ、陰一返ダ、アレドモ玉花ガ開ケバ陰ニ陽ヲ帶ビタトキ沈マヌ一機ダ、二ノ句ハ、風ト云ハ德風ノ一、清香ト云ハ德香ノ一ダ、風追一垓ト向上ノ主此ノ誰ソノ德風德香ガ九垓ニ満チ一ダ、都ハ九条ニ配ル呈ニ、九垓ハ九ノ重ノ都ダト云テ、九里八町ニワツタ都ノ一デハ無イ、爰デハ誰ソノ本居ノ一ダ、三四ハ、勿謂一來、威音前ノ一箭誰ソノ一人ニ叶ウ処ニ私シ無イト云ノ證拠ダ、雲門ハ睦州門闥デ此一人人ニ眉毛ヲ結ビ紹統シテ御一ル、アレドモ宗派ヲバ雪峰ニ統デ御一ル、如其投子ノ青モ浮山遠指南ニ依テ、太陽ノ宗風ヲツ、ケテ御一ルガ、誰ソノ秘曲宗風ヲ紹イタミンハ叶ウ処ニ二ツハ無イ程ニ乾坤宇宙ノ間ダニ以心傳心ノ旨ニ私無イト頌シタ、

再吟ハ、付ケタ句ハ、皇天無親、天子ニ父母無イ、臣下モ無イ、一人ノ德用ヲ左輔右弼シタ呈ニ、見立テモ、陰陽洞濟ノ兩重ヲ國父國母トミタ、爰テ一天ノ主シト云ハ、威音前ノ一箭、開闢以前ノ主ノ一ヨ、此ノ一箭ハ内紹門裡向上不出ノ主ナ呈ニ、天子ニ父母無イデ、ツイニ父母ノ惠ヲバ御受ケナイトキ兩重ノ山射透ダ（『大淵和尚再吟』上、一丁表一裏）

【Ⅱ類】本則十頌古十「本則の抄十頌の抄」十説破（引句）十「説破の抄」

①本則 ②頌

③私云（①本則・②頌古の解説）

イ、本則の抄

ロ、頌の抄

④説破……「破云」、古人の頌をふまえて説破。

ハ、説破の抄

〈具体例〉

南泉斬猫佛眼遠頌

抄云、池州南泉普願、鄭州新鄭人也、姓王氏、法ヲ嗣馬祖道一也、南岳ノ孫也兩堂首座ハ前堂首座後堂首座也、猫児ヲ争フ次テ、南泉ノ急度提起シタハ、意路不到ノ提撕、不渡言詮、急着眼看、衆無対、道不得也、意路ニ不渡、呈ニ南泉モ斬却シタゾ、南泉趙列同心同意ノ人ナ呈ニ拳似シタゾ、趙列便手脱草履頭上ニ載テ出テタハ意路不到ヲ迷タゾ、サテコソ南泉モ同道底ノ人ヲ得テ、汝若在シカバト云ハレタゾ、當門派デ第一機ヲ當行ノ動顛驚走スル呈扣ク古則タゾ、竹篋背觸ノ脇ト心得サシ、

△頌モ、國ヲ安ジ家ヲ安スル一ハ、武兵ニハヨラヌ也、魯連カ一箭モ多情、

魯連ハ射手ノ名人ナレト、其レモ多情ゾ、多情ハタクミハカル間ダテ事六ヶ敷イ「ダゾ、タクマヌ理ヲ天然ノ太平ト云タゾ、三千一趙ノ文王ノ三千ノ劔客ヲ養テ、タ、カワシメテコルト云「ガ在ル、爰デハ三千ノ劔客ハ入ラヌゾ、將軍太平ヲ建ル「ヲ独許スト也、言ハ南泉ツ、ト斬タハ兵ヲ借ラヌゾ、呈ニコソ独許ステハ在レ、

△同破云、一刀下ハ花ヤ今宵ノ有主ナラマシ、サレバコソ独許一太平

引而、行暮レテ木ノ下タ影ゲヲ宿トセバ花ヤ今宵ノ有主シナラマシ

法門ハ、薩摩守忠則伐死ニノ時キ、エヒラニ付ケラレタ詠歌ダゾ、ツ、ト打落メ一刀下ハ花ヤ今宵ノ有主マテヨ、刀鋒下ヲ犯サス「ダゾ、呈ニコソ頌モ安國安家不在兵ト云タゾ、刀鋒下ヲ犯スハ兵ノ漢タゾ、魯連劔客ノ徒黨ハ寄付モセヌゾ、呈ニコソ、一刀下ヲ独許ス將軍建太平、ト頌シタゾ、サレバコソ、エヒラ計リ丹尺計リタゾ、影モ在テコソ（『鉄外和尚再吟』下、二表一裏）

【Ⅲ類】 本則＋頌古＋説破＋抄

① 本則 ② 頌

③ 説破

④ 抄……本則の抄・頌古の抄・説破の抄が未区分となったもの、【Ⅰ類】④の抄（イ・ロ・ハ）の部分の不完全形

〈具体例〉

趙州兵馬十二汾陽昭

僧去閭中路不遥、報言軍馬鬧嘈々、問師回避居何處、恰安眠日正高

同破云、トアル山下ノ溪辺ニ趣ク客ノ袂ヲキツトヒカエテ、惜哉、必ズ岬江

ノ猿邑ニ耳辺ヲサワガ走ズヨ、ト云テ、趙老山上ノ日用ニハ恰好一高シ、向道莫行下路、果聞猿叫斷腸声

心ハ、先ツ閭州ニハ一千五百人ノ衆ナ程ニ丁ト打、ハタト喝シ、商量浩々ガ兵馬ノ地ダ、程ニ爰ヲ山下ノ路チ、兎徑横徑ト見タ、ナセーバ棒声喝声ガミナ耳ガシマシイ猿声ダ、此ノ僧モ彼コエ到タ郎ニハ耳辺ガサワガシカ郎ズト云ガ作者ノ説向ダ、サテ趙州ノ御家デハ知不知棟扱ガ山下ノ路、斷腸ノ猿声ダ、亦恰好ハ普灯ノ首ヲ書ニ寂クニシテ閑ニ照ス負チト在ルホトニ、寐參ノ門底ノ「ヨト云ハ、知不知ヲ離レタ大虚廓然ノ道体ヲサシタ、此ノ地ニ何ニガ山下ノ猿声ハ到郎ズ、趙州杯ハ始メヨリ棒喝ノ地ニ下ラヌ其ノ羊ナ猿声ニ斷腸セヌ人ヨ、今日モ寂寥ノ地ニ立テ於イテ被中ノ軍馬嘈々ト見タゾ、未モ恰一高シト日三竿ニ上迄デトロリト打チ眠タ、此枕子下ニ山下ノ猿声ハ聞エヌ時キガ、山上ノ路寂寥ノ行季テ走ゾ（『大淵和尚再吟』下、三二裏一三二表）

一試論ではあるが、これによつておよそ再吟の諸形態を整理することができのうではあるまいか。例えば『大淵和尚再吟』・『鉄外和尚再吟』についてこの類型をあてはめてみるならば、およそ次のごとくである。

『大淵和尚再吟』の場合

【Ⅰ類】 上巻 一五例 中巻 一一例 下巻 一七例

【Ⅱ類】 上巻 ○例 中巻 ○例 下巻 ○例

【Ⅲ類】 上巻 三二例 中巻 四八例 下巻 三三例

『鉄外和尚再吟』の場合

【Ⅰ類】 上巻 五例 下巻 三例

【Ⅱ類】	上巻	三四例	下巻	一一例
【Ⅲ類】	上巻	三例	下巻	三九例

このうち大淵の場合【Ⅱ類】が全く見い出せないのが特徴的であるが、いずれにせよ再吟における古則拈提形式は、同一撰述者においても、複数の形式によっていることがわかる<sup>⑤</sup>。

ところでこうした拈提形式において従来より問題となっているのが、「再吟」という語である。この「再吟」なる語は、無論「○○和尚再吟」として典籍の表題に用いられるとともに、再吟文献中にもしばしば登場する語である。従来この「再吟」、すなわち「再び吟ずる」という語の意味内容については、これが再吟という文献の性格自体を特徴づけるキーワードとして、すでに先学によって問題とされてきたのであるが、これまでの研究における「再吟」の基本的解釈は、本則頌古の後の「破云」で始まる拈提に対する再吟味として考えられてきたようである。しかしこれについては一私見（上述の再吟の拈提形式の分類でもすでに提示している）があるので、以下において此の問題について具体的に述べてみたい。

まず、再吟文献中の拈提の最後の文脈で登場する「再吟ハ（モ）」（上述の【Ⅰ】【Ⅱ】の④のハ）という語について検討してみると、これはすべての本則拈提において出てくるのではなく、定まった形ではない。他にも「説破ハ」、「法門ハ」、「破ハ」、「私云」、「心ハ」などの語というさまざまな形で登場するのであり、「再吟」という語が固定化されていないことが注意されるであろう。したがって再吟文献におけるこの再吟の位置づけが問題となるのであるが、少なくとも「再吟」は「説

破・「破」・「法門」と共通の、あるいは重複する意味内容を有することが推察されるであろう。

ところで「再吟ハ……」といった場合の、それ以降の文脈をたどっていくと、その内容はすでに提示されていた「破云」で始まる説破の部分に対応し、その多くは説破の「引句」の解説であることが認められるのである。すなわち「再吟ハ」で示される以下の部分は、説破の注解であって、「再吟ハ……」「説破ハ……」「法門ハ……」といったときの「再吟」・「説破」・「法門」の意味内容は、その後の文脈を指示せず、基本的には前の説破を指示している（法門については後述）と考えるべきであろう。これはその前の文脈（【Ⅰ】④のイ・ロ、【Ⅱ】③のイ・ロ）で登場する「本則ハ……」「頌ハ……」といった場合も同様であり、それらは本則そのもの、頌そのものを指し示しているのではなく、本則の意、頌の意を確認するためのものであったのである。したがって「再吟ハ」「説破ハ」とは、「前述の再吟の意は（心は）」「前述の説破の意は（心は）」という文脈で解釈すべきであろう。

したがって文中に現れる「再吟」なる語は、「破云」で始まる説破をさすのであるが、しかし「説破」という語そのものと同義ではない<sup>⑥</sup>。結論を述べるならば、筆者は再吟とは、本則に対する古人の頌古による拈提をふまえて、さらに再び拈提すること、説破することではないかと考える。

これは後で触れる再吟の引用典籍の問題と重なるが、再吟文献が再吟であるために共通して有する基本的条件は古則に対する頌古が前提として存在するということである。たとえば『○○和尚再吟』といっ



た一撰述者の再吟集でも必ず頌古が不可欠であるし、また『碧巖集再吟』といった典籍においても、やはり公案に対する頌古（雪竇頌古）が『碧巖録』という公案集の前提として存在している。つまり再吟の「再」とはこうした古人の拈提頌を前提にさらに説破したものと考えられるであろう。

従って再吟文献では、古則・頌に対する洞門僧の説破（＝再吟）が再吟の主要部であり、例えば、『大淵和尚再吟』などでは、本則・頌古・説破のみが示され、抄の部分が存在しない場合を幾例も見い出されるのである。したがって禅僧の説破を収録した典籍を「再吟」として書名に用いたのも、やはりこうした所以からであると考えられる。

尚、再吟集における個々の説破においては、多くの場合、引用句が「引而……」といった形で示され、また引用句の典拠も明示されている。それは語録の一部であったり・和歌・民間説話等多様なものであるが、いずれにしても説破の内容において、この引用句がポイントとなっており、「説破ハ……」「再吟ハ」の注解部分ももっぱらこの引用句の解釈に終始しているようである。ただこの引用句は必ずしも全本則に存在するわけではないので、代句が不可欠である代語集（多くは出典も明記される）のような場合とは異なって、再吟における絶対的必要条件ではないであろう。従って前記の筆者の再吟の形式的分類では、説破の一要素としてたものの、特に独立した項目として位置づけなかった。

#### 四、再吟における本則とその出典について

前節では再吟の拈提形式についてまとめてみたのであるが、以下において再吟文献の内容的考察の一つの手順として諸再吟集の古則の引用状況を確認してみることにしたい。ここで対照したのは、ある程度まとまった古則数を拈提している『天南和尚再吟』・『勝国和尚再吟』・『大淵和尚再吟』・『扶桑再吟』・『鉄外和尚再吟』・『火堯和尚再吟』の六書である。比較対照の方法としては、六書のうち一六四則という最も多くの本則を有する『天南和尚再吟』の古則目録を掲げて、他五書に扱われる本則と共通するものを対照し、『天南和尚再吟』に存在しないその他の古則については、その後に二〇一番から列挙し、同じく古則と五書の再吟類との対照表を作成した。（二〇―一四頁）尚、『天南和尚再吟』で同じ古則が二度以上拈提される場合も、本表ではそのまま列挙し、目録通りの番号を付けたが、二度目以降の古則の場合は「前出」と記して対照事項を省略した。○△×の記号については後述する。

こうした中、左記の対照表でまず注意されるのは、天南松薫をはじめとするそれぞれの再吟撰述者が、しばしば同じ古則を本則として取り上げ、繰り返して拈提しているという事実である。例えば『天南和尚再吟』の一六四則の本則目録の中、五一則は再拈提であって、重複を除いた本則数は一一三則である。このように再吟文献における本則はしばしば繰り返されて説破拈提されているのであり、『勝国和尚再吟』・『鉄外和尚再吟』・『火堯和尚再吟』などもやはり同様に、それぞれ同じ古則が別の箇所に散見されている。



三二	趙州石橋	三橋路	五、二九	下、二二(2)	上、二三	三八、表
三三	雪峰鼉鼻蛇	二〇兔蛇	一、一九	上、二(4)	下、二二	九、裏 二九、表
三四	船子夾山	一五舟楫	二、七 四、七	中、一八(6)	上、二八 下、二四	五一、表
三五	黃檗檀酒糟漢	六示寂	三、三〇	上、六(2)	上、二五	三、裏 二七、裏
三六	臨濟無位真人	一〇人境	一、一〇 三、一〇	中、一(3)	下、二三 下、二三	一九、表 二三、表
三七	百丈奇特事	一一住山	二、二七 四、四	下、八	下、三〇	五二、裏
三八	德山入門棒	六棒喝	五、一四	下、一(2)		
三九	同安家風					
四〇	臨濟瞎驢滅却	一三遷化	一、二八 三、一五	中、一五		
四一	鳥窠布毛	九侍者	二、一四 四、三	下、七		
四二	乾峰三種病人	二法身		中、一六		
四三	南泉一圓相	七圓相	一、一六	中、一三(2)		
四四	曹山諸佛本源	拈頌集		下、二四		
四五	黃竜念讚	二〇竜虎		下、四四		
四六	夾山三日書	一一庵居	三、七	上、九		
四七	雪峰鼉鼻蛇	(前出)				
四八	百丈野鴨子	二〇飛走				
四九	黃檗檀酒糟漢	(前出)				
五〇	南泉斬猫	(前出)				
五一	德山乃去也	二仏祖	二、一五 四、一〇	中、九(3)		
五二	楊岐三脚驢子	二仏祖	五、二六	下、三五		
五三	慧寂慧然問答	九姓名	五、一五	中、二一		
五四	馬祖不昧本來人	十心眼		中、一〇(3)		
五五	黃檗檀酒糟漢	(前出)				
五六	浮山八十翁翁	九法属		上、一二(2)		
五七	三聖透網金鱗	(前出)				
五八	臨濟松栽	一九草木	一、二四 三、一九	下、二一		
五九	趙州三喫茶	(前出)				
六〇	保壽開堂	(前出)				
六一	非心非仏	(前出)				
六二	奚仲造車	(前出)				
六三	香巖樹上	一九草木	一、一二	上、三(3)		

六四	○趙州至道無難	(前出)	五、二五	上、七(3)	一、一七	上、三三 下、二八	四、裏七、表
六五	○多福一双竹	一九草木	四、二三	下、三〇		下、二八	二八、表三七、表
六六	○德山未跨棒	六棒喝	二、二〇				五〇、裏
六七	○臨濟四喝	六棒喝					
六八	○趙州無	(前出)	四、八			上、二〇	七、裏三〇、表
六九	○雲門一曲		一、二五 二、五	下、一九(3)			
七〇	○仰山劃一劃		三、二九				
七一	○世尊拈花	一九花菓	三、一七 四、一八		一、一五 四、五	上、一九 下、二一 下、一	二、表四一、裏
七二	○百丈野鴨子	(前出)	三、九				四八、裏五四、表
七三	○雪峰住庵	一庵居	五、一八	上、二二(3)			
七四	○石頭鉏斧住山機緣	一一住山					
七五	○牛過窓櫺話	無門関					
七六	○洞山無寒暑	(前出)					
七七	○雪峰透網金鱗	(前出)					
七八	○五祖演五家問	二仏祖	一、一三 四、二〇	中、六(3)	一、一五		四九、表五〇、表
七九	○雲門轉句	六示衆	四、二一	下、一一			五三、裏
八〇	○林齋活埋	一九田地					
八一	○保福長慶遊山	一二遊山					
八二	○趙州四門	(前出)	二、一三	下、一三		下、九	二七、表五四、裏
八三	○翠巖眉毛	一四解結					
八四	○迦葉刹竿	一五衣鉢					
八五	○芭蕉拄杖	一六杖笠					
八六	○百丈野鴨子	(前出)	五、一三	上、四(3)		下、四〇	
八七	○藥山陞座	五說法					
八八	○桐峰庵主虎聲廿二	〇竜虎					
八九	○黄檗嚙酒糟漢	(前出)					
九〇	○趙州婆子勘破	(前出)					
九一	○黄檗六十棒	(前出)					
九二	○風穴祖師心印	一宰臣	二、三			上、五	??
九三	○馬祖不昧本來人	(前出)					
九四	○雲門透法身	二法身	二、一六		二、一六	上、三六	
九五	○本來面目						



一三二	紫胡狗	二〇猫犬	三、四、三、五	下、四〇		二六、裏
一三三	洞山三身說法	(前出)				
一三四	明上座不思善	(前出)				
一三五	鴻山劉鐵磨問答	八齋粥	三、一	下、一七(2)	三四、裏	三四、裏
一三六	梁山祖意教意	四祖教	一、一八	中、七(3)		
一三七	德山廓侍者問答	普灯録	一、八	下、五		
		拈頌集	三、一四			
一三八	洛浦一隻箭	九侍者				
一三九	透網金鱗	(前出)				
一四〇	德山入門棒	(前出)			一、四	
一四一	百丈野狐話	(前出)				
一四二	乾峰法身三種病	一二因果				
一四三	普化鈴鐸	(前出)				
一四四	藥山直指人心	一一參學				
一四五	黃竜念讚蓬種	(前出)				
一四六	閩王羅山開堂	一帝王		中、二五		
一四七	龐居士心及第歸	八祖喝		下、四五		
一四八	玄沙指頭築著	一一參學				
一四九	臨濟四喝	(前出)				
一五〇	雪峰鼉鼻蛇	(前出)				
一五一	馬祖四句百非	四祖教	三、二五			
一五二	道吾極則事	一六餅錫		下、二三		
一五三	六祖風幡	一四風雲				
一五四	趙州三喫茶	(前出)				
一五五	禾山解打鼓	一七法器	四、一四、二三			
一五六	南泉茅鎌子	一二遊山				
一五七	慈明行脚問答	八祖喝				
一五八	六祖伝衣	三橋路				
一五九	橋板打落	一六杖笠				
一六〇	蓮華峰庵主	七対機				
一六一	道吾不識	五悟道				
一六二	雪峰鰲山成道	(前出)			一、一八、七六	
一六三	南泉斬猫	(前出)			一〇	
一六四	香巖擊竹悟道	(前出)				

五再吟集で二回以上扱われる古則

二〇一	〇青原廬陵米	四問法	一〇心眼	一、九三、八	上、一〇(3)	一、一九	上、二七	四八、裏
二〇二	〇五祖西來五字	一〇心眼	一〇心眼	二、一〇〇五、一二	中、四	一、二三	下、一四	四三、表
二〇三	〇曹山掃地話	一〇心眼	一〇心眼	三、三	中、四	一、二三	下、一四	四三、表
二〇四	〇定上座停立	四問法	四問法	二、一〇〇五、一二	下、二九(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二〇五	〇瀉山水牯牛	二〇牛鹿	二〇牛鹿	二、一〇〇五、一二	下、二九	一、二三	上、三七	四三、表
二〇六	〇馬祖即心即佛	一〇心眼	一〇心眼	二、一〇〇五、一二	下、二九	一、二三	上、三七	四三、表
二〇七	〇世尊陞座	五說法	五說法	二、一〇〇五、一二	下、二九	一、二三	上、三七	四三、表
二〇八	〇巴陵吹毛劍	一七刀劍	一七刀劍	一、九三、八	下、二九	一、二三	上、三七	四三、表
二〇九	〇五祖阿誰話	一〇心眼	一〇心眼	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二一〇	〇盤山三界無法	一〇心眼	一〇心眼	二、一〇〇五、一二	中、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二一一	〇長慶二種語	二〇心眼	二〇心眼	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二一二	〇國師三喚	無門関	無門関	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二一三	〇松子豎起	一六槌私	一六槌私	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二一四	〇雪峰粟米粒	一八糧食	一八糧食	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二一五	〇趙州栢樹子	四祖教	四祖教	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二一六	〇黃檗毒打	二〇牛鹿	二〇牛鹿	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二一七	〇竜潭紙燭吹滅	一九香灯	一九香灯	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二一八	〇石門家風	七家風	七家風	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二一九	〇巴陵提婆宗	一四雨雪	一四雨雪	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二二〇	〇興化中原一峰	一帝王	一帝王	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二二一	〇石鞏一張弓	一七弓箭	一七弓箭	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二二二	〇黄檗虎声	一四雨雪	一四雨雪	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二二三	〇二祖断臂	一四雨雪	一四雨雪	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二二四	〇仰山仰覆問答	一六槌拂	一六槌拂	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二二五	〇巴陵祖教問答	一六槌拂	一六槌拂	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二二六	〇趙州分疎不下	五大道	五大道	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二二七	〇長沙遊山	二遊山	二遊山	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二二八	〇靈雲桃花悟道	一九花果	一九花果	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二二九	〇馬祖不安	一三問疾	一三問疾	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二三〇	〇二庵主拳頭場	一五琴碁	一五琴碁	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二三一	〇太陽無相道場	一五琴碁	一五琴碁	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二三二	〇雲居居山好	一一住山	一一住山	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二三三	〇俱胝一指	一一住山	一一住山	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表
二三四	〇趙州布衫	四問法	四問法	二、一〇〇五、一二	上、一五(2)	一、二三	上、三七	四三、表

また『天南和尚再吟』をはじめとする再吟文献の本則目録を見る限り、それぞれの本則の配列については特に定められてはいない。折々にふれ、師家がそれぞれの見識に基づいて随意に古則を選択し説破していたのであり、基本的にはその説破の順に記録されて再吟文献が成立していったとみられる。

しかしながら再吟文献の中には、その編纂の過程において、明らかに古則の配列を再編されている事実も見出される。たとえば『大淵和尚再吟』には、一つの説破の後に「同則 同頌 同云」とか「同則 無尽居士頌云」（拈提頌を変えた場合）とあって、もう一度その古則を取り上げて説破しており、この再説破が二回、三回あるいは五回となる場合も見出される。ちなみに刊本全九八則中、四二則においてこの「同則 同頌 同云」と記した再説破が行われ、それが五回である場合が一則、三回である場合が四則といった具合である。したがって『大淵和尚再吟』では目録では上巻、二三則、中巻、三〇則、下巻、四五則となつてゐるが、実は個々の再吟の数は「同則 同頌 同云」を含めると上巻、五〇則、中巻、六三則、下巻、五六則で実質的には全体で一六九則の再吟となつてゐることがわかるのである。

尚、『大淵和尚再吟』には「禪道文刹」と外題される元禄十一年の奥書を有する写本が駒澤大学図書館に存在し、古則の数も八十一則と異同があるが、基本的構成はほぼ同じであり、一つの古則の説破の後に「同則云」として再説破が続けられている。また『鉄外和尚再吟』では特に下巻の二一「青原鋤斧子」以降にこのような傾向が見い出せる。さて、このように『大淵和尚再吟』では、一つの本則が同一箇所

多くの古則の再説破が記されていたのであるが、これらの再説破は大淵和尚が同一時期に引き続いて行なわれたとするよりも、再吟編集（あるいは刊行）の段階においてこうした形態に整理されたと考えべきであろう。つまり元来は他の再吟文献のように時間的に間隔をおいて別々の箇所に見られる同一の古則・頌に対する説破を同一古則として一箇所にとめてしまった可能性が高いと考えられる。こうした『大淵和尚再吟』などに対して、天南・勝国・火堯などの再吟の本則目録では、同一本則のほとんどが別々に配列され、叢林における本則拈提が別時であつたことを予想させるのであり、こうした再吟類は基本的には、説破の時間的経過をベースにして成立したものであると推察されるのである。

ところでこのような本則の配列、あるいは同一再吟における本則の繰り返しの問題以上に重要なことは、複数の再吟において、共通した古則が多く採用されていたという事実が、前述の対照表で明確に指摘されうるであろう。例えば七四の「青原鋤斧子」（計一五回）は、六書すべての再吟で取り扱われている。また六書すべてではなくとも、一〇の「洞山無寒暑話」（各再吟集による拈提総計二三回）、一〇五「恵超問仏」（五再吟集で計十一回）など、多数の本則が複数の再吟において拈提されており、『天南和尚再吟』の場合、一六四則のうち、他の五つの再吟集に採用されない本則は、一四則（このうち「同安家風」は二度出てくる）だけである。つまり『天南和尚再吟』の大部分の本則は、他のいずれかの再吟集にも用いられているのであり、再吟に頻出する古則というものが、ある程度限定されていたといえるのである。



ちなみに『天南和尚再吟』以外の五書において、それぞれ他の再吟で扱われる古則と共通するものは以下の如くである。

『大淵和尚再吟』の場合

全古則数 九八則

(ただしこの則数は目録により、再拈提のものは数えない)

他のいずれの再吟にも扱われていない古則の数

一九則

他のいずれかの再吟集に用いられる古則

七九則

『扶桑再吟』の場合

全古則数 六〇則

他のいずれの再吟にも扱われていない古則の数

二一則

他のいずれかの再吟集に用いられる古則

三九則

『鉄外和尚再吟』の場合

全古則数 九一則

他のいずれの再吟にも扱われていない古則の数

一七則

他のいずれかの再吟集に用いられる古則

七四則

ところでこのように再吟における本則がかなり共通するという状況において、重要となるのが再吟の古則のソースともいえる公案集の問題である。実は再吟文献において扱われる古則の引用状況はかなり特徴的であり、その選定には一定の条件を見い出すことができる。ちなみに今は特に目録に典拠が明示してある『大淵和尚再吟』『扶桑再吟』『鉄外和尚再吟』の本則目録によって検討してみたい。

まず大淵の場合、出典が明示されない「風穴解夏」(中、二九)「心空及第帰」(下、四五)の二則、『禪門拈頌集』からの「曹山諸仏本源」

(下、二四)、『嘉泰普燈錄』からの「廓侍者問答」(中、七)、これらの計四則を除くすべての本則は『禪林類聚』からの出典である。扶桑の場合も、出典不明の三則と『無門関』からの一則(「奚仲造車」三三)以外はやはりすべて『禪林類聚』からの引用である。また鉄外の場合は、『禪林類聚』七六則、『無門関』一五則、『碧巖録』九則、『普灯録』一則、といったような引用状況であり、再吟文献の末期に位置するこの鉄外の再吟では『無門関』あるいは『碧巖録』からの引用の比重が比較的大きくなっていることが特徴的であろう。

いずれにしても再吟文献における本則の引用は基本的には、『禪林類聚』『無門関』『碧巖録』の三書にほぼ限定されるのであるが、こうした再吟の依用典籍について確認すべき点は、これらの公案集には本則とそれに対する頌古が存在する、という共通の条件を備えていることである。すでに述べたように再吟という拈提方式においては、こうした頌の存在が必要条件であって、単に公案を集成した典籍では再吟文献の依用典籍とはなりえないのである。

こうした公案集のなかでも、『禪林類聚』が圧倒的な割合で本則として引用されており、必然的に再吟文献におけるこの公案集の占める位置は大変重要な意味をもっている。この『禪林類聚』は元の大徳一一年(一一三〇七)に善俊・道泰・智鏡の共編として二〇巻二〇冊本として刊行され、わが国ではこの二十冊本が貞治元年(一一三六二)臨川寺より五山版として刊行されている。その後五山版としては臨川寺希泉重刊本(貞治六年)や南禅寺周澤刊本があるが、近世には寛永一七年本(京都梅忠町開版)、慶安二年本(京都中野道伴)や延宝三年の卅元

師蠻訓点本（京都柳枝軒小川多左衛門）などが存在する。この二十冊本『禪林類聚』は、中世曹洞宗において大きな位置を占めるものであり、たとえば中世洞門僧の語録である代語文献では、もつとも多い数の代語の本則として本書の古則が引用されていたのである。

しかるに今検討する再吟文献においては、『禪林類聚』はその依用状況から見るに、代語文献の場合よりもいっそうその重要度を増しているのであるが、この『禪林類聚』について看過できぬ問題としては、

実はこの『禪林類聚』には『抜類聚』といわれる四冊本が存在するということであろう。これは同じ二〇巻から成つてはいるものの、先の二〇巻二〇冊本の中から主要な古則を抜粋して四冊にまとめた簡約本であり、慶長一八年京都高台寺版として刊行されて以降、寛永八年の高台寺版の重刊と京都安田十兵衛刊行本、さらには承応三年本と盛んに刊行されている。（ちなみに正統蔵に編入されている『禪林類聚』もこの四冊本である。）

ところでこうした二種類の『禪林類聚』の成立において問題となるのは、再吟文献がいずれの『禪林類聚』に基づいているのか、ということである。というのも実は再吟文献が集中的に撰述されている近世初頭は「四冊本類聚」が刊行されていた時期でもあり、特に再吟文献における四冊本刊行の影響はいかなるものであったのか、注目されるところであろう。

そこでまず、この四冊本『禪林類聚』（以下『抜類聚』と略）と、先に『天南和尚再吟』を中心に対照研究をなした本則とを対照してみたい。以下に示すのは、『抜類聚』の巻数と部門名を掲げ、これに収録さ

れた再吟の本則を配置したものである。このうち『抜類聚』に存在せず、二十冊本『禪林類聚』にのみ見られる古則については、その古則の番号の上に×を付けた。また『天南和尚再吟』（天）、『勝国和尚再吟』（勝）、『大淵和尚再吟』（大）、『扶桑再吟』（扶）、『鉄外和尚再吟』（鉄）、『火堯和尚再吟』（火）の各再吟に用例がある古則は、その下に明示した。（古則名の上に示した番号は前出の対照表で用いた古則番号である）

#### 再吟文献に依用される『禪林類聚』の古則

##### 第一

###### 古則数

帝王（二二） 武帝見達磨（天・勝・大・扶）

二〇四 羅山開堂（天・大・鉄）

一一三 投子十身調御（天・大）

二二〇 興化中原一峰（天・勝・大・扶）

九二 風穴祖師印（天・勝・扶・鉄）

二九 雲門話墮（天・勝・大・鉄・火）

##### 第二

佛祖（六二） 廣額屠兒話（天・大・鉄）

五一 徳山乃去也（天・勝・大・火）

五二 楊岐三脚驢子（天・勝・大・扶・鉄）

七八 五祖演五家問答（天）

一〇一 恵超問佛（天・勝・大・扶・鉄・火）

二二一 長慶二種語（天・大・火）

法身(二六)

四二 乾峰三種病人(天・大)

九四 雲門透法身(天・鉄)

佛像(八)

ナシ

第三

伽藍(九)

ナシ

殿堂(六)

一〇六 德山法堂背却(天・勝・大・火)

一三〇 雲居孤峰獨宿(天・大・扶)

塔廟(二)

ナシ

丈室(五)

ナシ

門戸(二〇)

一二 趙州四門話

橋路(二五)

三二 趙州石橋(天・勝・大・鉄)

一〇一 洞山獨木橋(天・勝・大)

一五九 橋板打落(天・扶・火)

第四

祖教(三二)

九 水潦問答(天・大・扶・鉄・火)

一二九 法眼覺鐵觜問答(天)

一三六 梁山祖意教意(天・勝・大・鉄・火)

一五一 馬祖四句百非(天)

二二五 趙州栢樹子(天・勝・鉄・火)

問法(二〇)

二〇一 青原廬陵米(天・大・鉄)

二〇四 定上座停立(天・勝・大・扶・鉄・火)

二三四 趙州布衫(天・勝・火)

第五

說法(九)

五 洞山三身說法(天・扶・火)

八七 藥山陞座(天・勝・大)

一二二 百丈捲席(天・鉄)

二〇七 世尊陞座(天・扶・鉄・火)

禪定(五)

ナシ

悟道(二六)

二〇 香巖擊竹悟道(天・大・扶)

一六二 雪峰鰲山成道(天・扶)

大道(二二)

二六 趙州至道無難(天・勝・大)

二二六 趙州分疎不下(天)

第六

示衆(二六)

三五 黃檗嚙酒糟漢(天・勝・大・鉄・火)

七九 雲門点句(天・勝・大・扶・火)

勸弁(三)

ナシ

棒喝(二七)

一三 黃檗六十棒(天・勝・大・鉄・火)

三八 德山入門棒(天・勝・大・扶・鉄)

六六 德山未跨棒(天・勝・大・鉄・火)

六七 臨濟四喝(天・勝・大・火)

第七

圓相(六)

四三 南泉一圓相(天・勝・大・火)

對機(三三)

一六一 道吾不識(天・扶)

賓主(三)

ナシ

家風(七)

二一八 石門家風(天・勝・扶・火)

第八

經教(二八) ナシ

看經(五) ナシ

講經(三) ナシ

論議(四) ナシ

祖喝(六) ナシ

一一九 投子威音前一箭

第九

姓名(四) 五三 慧寂然問答(天・大)

頭首(五) ナシ

知事(四) 一一四 瀉山淨瓶踢倒機緣(天・勝・大・鉄)

侍者(五) 四一 鳥窠布毛(天・勝・大)

一三八 洛浦一隻箭(天・大)

法屬(八) 九八 浮山法屬機緣(天・大)

一二三 投子威音前一箭(天・大・扶)

尼女(九) 二八 趙州婆子勘破(天・勝・大・鉄・火)

行童(二) ナシ

第十

人境(九) 三六 臨濟無位真人(天・勝・大・扶・鉄)

心眼(一一) 三一 保壽開堂(天・鉄)

五四 馬祖不昧本來人(天・勝・大・鉄)

二〇二 五祖西來五字(天・大・扶・鉄・火)

二〇六 馬祖即心即佛(天・勝・大・扶・鉄)

二二〇 盤山三界無法(天・大・鉄)

肢體(二三) ナシ

真像(五) ナシ

第十一

住山(四) 三七 百丈奇特事(天・勝・大・火)

開堂附 七四 石頭鉗斧(青原)(天・勝・大・扶・鉄・火)

二二三 雲居居山好(天・勝・扶)

庵居(二二) 四六 夾山三日書(天・勝・大・扶・火)

七三 雪峰住庵(天・勝)

二三〇 二庵主拳頭(勝・火)

戒律出家附(二) ナシ

參學(一九) 一四四 藥山直指人心(天)

一四八 玄沙指頭築著(天・火)

禮拜(五) 一 道吾女人拜(天・大・扶)

省訪(五) ナシ

第十二

遊山(二三) 八一 保福長慶遊山(天・大)

辭送附 一五七 慈明行脚問答(天・火)

二二七 長沙遊山(天・勝・大)

馳書(三) ナシ

緣化(二) 一五 保壽本來面目(天・扶・鉄)

應化(三) ナシ

神異(七) ナシ

因果(四) 一四一 百丈野狐話(天・扶)

沐浴(二) ナシ

偃息(二) ナシ

第十三

問疾(五) ナシ

醫卜(二) ナシ

藥餌(二〇) ナシ

遷化(二〇) 四〇 臨濟瞎驢滅却(天・勝・大)

追忌(二) ナシ

第十四

歲時(八) 一〇 洞山無寒暑(天・勝・大・鉄・火)

解結(四) 九九 洞山三頓棒(天・大)

日月(八) ナシ

風雲(六) 二二五 六祖風幡

雨雪(六) 一二四 龐居士不落別(天・勝・大・扶)

二二三 二祖斷臂(天・勝・大)

水火(二二) 三〇 萬法不侶(天・勝・大・鉄・火)

第十五

衣鉢(五) 八四 迦葉刹竿(天・大・鉄・火)

服飾把針附(三) ナシ

鞋襪(二) 一三二 睦州擔板漢(天・勝・大・鉄)

珍寶(八) ナシ

琴碁(三) 二二二 太陽無相道場(勝)

簾帳(二) ナシ

舟楫(八) 三四 船子夾山(天・勝・大・鉄・火)

第十六

法器(六) 一九 普化鈴鐸(天・鉄)

一五五 禾山解打鼓(天・火)

槌拂(六) 四 首山竹篋背觸(天・勝・大・火)

二二三 弘子豎起(天・大・火)

二二四 仰山仰覆問答(天・大・火)

数珠(二) ナシ

餅錫(四) 六 南泉鄧隱峰(天・扶)

二三四 麻谷兩錫(天・勝)

杖笠(二〇) 八五 芭蕉拄杖

二二二 蓮華峰庵主(天・扶)

鏡扇(六) 二二一 犀牛扇子話(天・大)

第十七

器用(二四) 一五六 南泉茅鎌子(天・勝・火)

刀劍(六) 二〇八 巴陵吹毛劍(天・勝・鉄・火)

弓箭(四) 二二一 石鞏一張弓(天・勝・火)

骨董(二三) 二 楊岐栗棘蓬(天)

第十八

糧食(五) 二二四 雪峰粟米粒(天・扶・鉄・火)

齋粥(二〇) 一二七 金牛飯桶(天・勝・大・火)

一三五 滄山劉鐵磨問答(天・勝)

餠餅(三)

ナシ

五味(四)

ナシ

茶湯(七)

八 趙州三喫茶(天・火)

摘茶附  
蔬菜(六)

ナシ

第十九

田地(九)

三 百丈開田大義(天)

八〇 林齋活埋(天)

草木竹附(七)

五八 臨濟松栽(天・勝・大・鉄)

六三 香巖樹上(天・勝・大・火)

六五 多福一双竹(天・勝・扶)

花果(一二)

七一 世尊拈華話(天・勝・大・鉄・火)

二二八 靈雲桃花悟道(天・勝)

香燈(四)

二二七 竜潭紙燭吹滅(天・勝・鉄・火)

撥掃(二)

二〇三 曹山掃地話(天・大・鉄)

柴薪(三)

ナシ

第二十

獅象(二)

ナシ

龍虎(七)

四五 黄竜念讃(天・大)

×八八 桐峰庵主虎聲(天・鉄)

牛鹿(一二)

二〇七 瀉山水牯牛(天・勝・大・鉄)

二二六 黄檗毒打(天・扶・火)

猫犬(四)

一四 南泉斬猫(天・勝・大・扶・鉄・火)

一六 趙州無話(天・勝・大・鉄・火)

一三三 紫胡狗(天・勝・大・火)

龜魚(四)

七七 雪峰透網金鱗(天・大)

兎蛇(五)

三三 雪峰鼈鼻蛇(天・勝・大・鉄・火)

飛走(一五)

四八 百丈野鴨子(天・扶・鉄・火)

こうしてみると、再吟に用いられている古則は『禪林類聚』である  
とはいえ、わずかの例外を除き、ほとんどが『抜類聚』の古則の枠組  
みの範囲から出ることがない、ということが明らかである。そしてこ  
うした事実が、再吟撰述者が二十冊本『禪林類聚』を用いて古則を抽  
出し、それが偶然に『抜類聚』の古則の枠組みに当てはまるという可  
能性をまったく排除するものであろう。たとえば『抜類聚』を知らな  
い室町期の龍州文海らの代語集は多く『禪林類聚』を引用するが、そ  
こに『抜類聚』以外の古則をわれわれはすぐに見い出すことができる  
のである。やはり再吟は同時代に刊本として出回った『抜類聚』に基  
づいていたのである。

しかしながら再吟本則に用いられる古則の範囲は、『抜類聚』の古則  
の枠組みとも同一ではない。前記の『抜類聚』と古則との対応表を見  
ても、明白であるが、再吟に用いられている古則はさらに限定的であ  
る。

たとえば『禪林類聚』の最初である卷一帝王の部門では、元来二十  
冊本で六十五則であった公案が、『抜類聚』では十二則と大幅に縮小さ  
れている。そして再吟で用いられるのはこのうち「武帝見達磨」「羅山  
開堂」「投子十身調御」「興化中原一峰」だけであり、これらが複数の

再吟文献に多用されていたのである。こうした傾向は全体に亘るのであって、再吟文献では『抜類聚』をその源泉としながらも、さらにより限定された古則が多く、再吟文献によって扱われており、ある程度限定化された古則の枠組みが想定されるのである。

すでに代語文献について、その本則の取り上げ方について検討し、『禪林類聚』からの引用は、背景となる叢林行事と密接な関連があったことを示したが、『禪林類聚』以外の典籍については詩文集や語録・燈史などからの引用を見る限り、比較的多様な引用状況である。そしてさまざまな代語集の古則を列挙してみると、本則の集合の枠が次第に広がりが増していく感があるのであるが、一方再吟文献はどの再吟集を見ても、そこで取り上げられる大多数の古則がある一定の枠からはみ出ることがない、という印象を持たざるをえない。まさにこのような本則の選択状況も再吟文献の一つの大きな特質であろう。

#### 五、再吟文献と「法問」・「法門」について

さて次に検討されるべきは、この再吟文献の成立の基盤となった叢林行事の問題であろう。こうした古則と頌を前提に独特の拈提方式は、当時の叢林において、いったい如何なる場・如何なる時節に会下に示されたのであろうか。この問題についてはすでに樋渡登氏の前掲論文七・八の論考によって、法問（または法門）との関連が指摘され、特に具体的な時期がわかるものについて、（イ）入院初法門、（ロ）年頭法門、（ハ）江湖法門の三類を提示されている。またこの法問の歴史については、筆者も法問の起源と歴史について検討し、乗弘起源説や双

林寺の十人老僧、御前法問などについて指摘した。

ところで樋渡登氏も指摘されるように、再吟の説示は確かに法問にもとづくものの、通常は具体的な時期は明示されず、前記の三つの行事の他には歴住の法要や仏事、あるいは有力武士に対する城中での法問<sup>⑩</sup>などについてのみ、知ることができるのである。

ただ正月五日に法問始めという行事があつて、再吟文献に説示時期不明の多くの説破が収録されていることから、この法問は随時不定期に行われたに相違あるまい。代語文献では叢林の年分行事に従つて下語（代語）されていたのであるが、これはかつての禪林の上堂・小参の伝統に属するものであつた。しかるに法問を収録した再吟文献はこうした年分行事との関連性は薄く、まさにこの点において代語文献と性格を異にするものである。元来法問とは「双林寺の十人老僧」や龍文寺の法問の伝統にみられるように、上堂語として説示されるような正式の説示ではなく、古則参得において自由に切磋琢磨した叢林修行であつた。しかしこうした法問も江湖会初頭の五則法問が行われるようになると、修行僧の出世行事としての乗弘の性格も有するようになり、多分に儀礼的な性格を帯びるようになっていく。こうした傾向はさらに武士階級に対する御前法問（公開法問）や祈禱法問のような事例として、さらに法問の性格を変えていったのあり、法問自身もある意味で多様な意義・目的・適用がなされていったのである。

ところで再吟文献にしばしば明記される法問の中でも、一月五日の「法問初め」は種々の清規類にも確認でき、その説破の概要を窺い知ることができる。たとえば大安寺藏『回向并式法』では

次飯了テ法問鐘、東廊ノ雲板ヲ鳴ス、大衆各々著被位、住持於禪床上、  
拳鑑板、本則頌古ヲ唱エ了テ、大衆首座尽説破シ、了テ便餅子在リ、大衆散ス、

とあり、これによると本則頌古を住持が唱えてから、首座や大衆が説破していることが知られる。

また『梶樹林清規』下、では

法門始ト称ス、朝課罷礼佛ノ後、主人著椅、侍者等拂子竹篋ヲ攜来ル、  
主人先拳則、次二侍者頌ヲ唱ヘ、説破開口ス、主人垂語了テ、大衆三  
拜、次主人下椅、向本尊三拜、大衆同拜、次賓主ノ礼常規ナリ、晚間庫  
堂ノ雜煮ヲ云法門餅

とあり、本則を住持が拳し、侍者が頌を唱えて、最初に説破をなす、  
といった様子を知ることができる。

ただここで問題となるのは、法問始めの説破として記録された再吟  
文献のソースとなる説示形態が、この清規類の法問行事の中に特に具  
体的に明示されていないということである。『回向并式法』では、住持  
が本則・頌古を拳するのであって、説破は首座や大衆であり、再吟の前  
提である住持（撰述者）自身の説破を示した提唱の記述が見い出せな  
い。

中世室町期の法問の様子は、前出の『回向并式法』の例外はあま  
り資料として残っていないのであるが、たとえば『勝国和尚再吟』に  
は雑談として、龍州文海の頃の法問の様子を次のように伝えている。

竜州和尚ハ二度目ノ江湖ヲ宇都宮ノ成高寺手短正貞ノ御会下テ被成也、  
夫ノ時キ古則始メニ六十棒ヲ出シテ恩一ル、早ヤ開口脇キヨリ棒下ノ

一句ヲ敲キ被成也、座中エ入ル時分ヨリシテ俄カニタ立リカシテ透ル  
也、処ヲ竜州サマノ法問ニ此ノ話ノ説破ヲバタダ今ノ夕立ガシテ透ッ  
タソ、意氣——流ト被仰タ、此ノ時キ正貞和尚ノ證明在ツテ椅子ノ上ヨ  
リ金ノ團扇ヲ竜州ノ前エ抛、ゲ出シテ今日ヨリシテ文海此ノ團扇ヲ以  
テ法問ヲ云ワシマイト被仰也、（二、二「六十棒」）

このように龍州の参学時代においても会下による古則説破という点は  
変わらぬようであるが、やはり師家の説破の記述は見い出せない。

ただ『梶樹林清規』において大衆説破の後、主人の垂語が見られ、  
注目されるところであるが、大乘寺系の再吟文献はまったく伝えられ  
ないところから、この垂語をもって再吟の説示形態と速断することは  
できぬであろう。この他法門の伝統を有する可睡斎や竜穩寺の清規に  
おける法門の記述を見てもやはり明らかでない。ただ、再吟文献自身  
に再吟（説破）が入院や法問始めなどの法問の時期を指示している以  
上、再吟が法問における説示であることは否定できないであろう。筆  
者はこうした再吟における古則説破あるいは古則頌等の注解は、今日  
にも伝わる本則提唱の形態に相当するのではないかと考えている。本  
来法問は法戦としての学人の古則商量であるが、その本則拈提の模範  
的な説破を示したものととして、この提唱形態が中世曹洞禪後期に成立  
したのであり、これを反映したのが、近世初頭続々と撰述された再吟  
文献ではなかったのではなからうか。

ところで再吟文献には、説破の注解の部分の冒頭にしばしば「法門  
ハ」「法問（ノ心）ハ」などとあつて注解が開始されている。これは再  
吟形式の類型の【I】と【II】のいずれの形式においても見えるので



あるが、これらの用例は、やはりその前提として叢林内で行われている法問に基づいていると考えるべきであろう。しかしここで筆者が問題とするのは、「法問」と「法門」という言葉の混在と、両者の言葉の示す意味内容についてである。

例えば『勝国和尚再吟』では、この「法問」と「法門」は同じ文脈において、区別なく用いられている。

○法問ハ天童法語ノ内ノ言ババ借ツテ見タ（一、三）

●法門ハ後醍醐ノ天皇ノ時中山門三井寺ノ教者共ト紫野ノ大応国師ノ宗論ヲシテ悉ク教者共ノ袈裟ヲハギ取テ下モ部ニシテ紫野エ興ヲ昇セテ行カセラレタ由来ヲ引タ（一、七）

一方『鉄外和尚再吟』では、もっぱら「法門」のみが用いられている。

法門ハ如来先佛以一心法、欽光慶喜達磨ニ至テ凡二十八祖東土ノ二三曹溪青原希遷孫子快庵一派、今山僧ニ至テ從來——子々——代々昌ナコトデ走（下、一）

法門ハ薩摩守忠則伐死ニノ時エヒラニ付ケラレタ詠歌ダゾ、ツ、ト打落シテ一刀下ハ花ヤ今宵ノ有無視マテヨ、刀鋒下ヲ犯サヌコトダゾ（下、二）

ところでこれらの用例を見ると、これらの「法問」・「法門」という言葉は、必ずしも叢林行事としての法戦式そのもの示しているとはいいがたく、ここでは若干異なったニュアンスで用いられている。すなわち叢林における法戦式としての法問は、あくまで首座や大衆による古則の説破をも含めた内容のものであるが、こうした再吟文献に

はその撰述者以外の会下の説破については記されることはない。この場合の「法問」「法門」はあくまで住持（再吟撰述者）としての説破であり、古則に対する模範的な説破の会下への開示として限定されるものではある。また上述の『勝国和尚再吟』や『鉄外和尚再吟』の例に見るように、しばしば「法問」・「法門」が引用句そのものを指示する場合も多く見い出せるのであり、（無論「法門」ということばそのものが、引用句を示すわけではない。）これはやはり引用句が法問における説破の中心的役割を果たしていたことを示すものである。

こうしたことから「法問」と「法門」という語が混用されている問題について考えるならば、たとえば『鉄外和尚再吟』において、一貫して「法門」という語が用いられたように、この「法門」という語に内包される「教え」「教説」の語義と、撰述者の（「主人」）の古則の見解・教えとが、同一に理解されているのではないか、とも推測されるのである。しかし『勝国和尚再吟』では「法問」と「法門」が混用されており、また清規類でも『栴樹林清規』などに、行事としての「法門」の使用例があることから、単なる表記上の問題として解消することもできるかもしれない。ただいずれにしてもこの「法問ハ」「法門ハ」といった語は本則・頌古の後に示された説破に対して、「再吟ハ（モ）」「説破ハ（モ）」「破ハ（モ）」といった語と文脈で使用されていたのであり、叢林行事としての法問を前提としながらも、本来の法問とはニュアンスを異にする意味内容が含まれていたということができよう。尚、再吟文献における個々の本則の主題と叢林行事との関係について、若干補足しておきたい。すでに代語文献の研究において検討した

ように、代語集では個々の代語のテーマと本則とその前提となる年分行事と一致する傾向が見い出せたのであるが、再吟文献ではほとんどの場合が説示された時期が不明なため、こうした叢林行事との関連づけの問題は少ない。しかしながら特定の法問行事においては、ある程度決まった古則が取り上げられ、説破されている。<sup>(12)</sup>

たとえば入院初法幢や法問初めのときの本則は、以下のごとく、「青原鉤斧子」「羅山開堂」がよく用いられている。

(一) 亦タ當則ヲ人毎入院法門初法幢ノ古則初二云事ナガ其ノ修行ハ在ルマ  
イソ(『扶桑和尚再吟』二、一「青原鉤斧子」、二卷、五丁表)

(二) 心ハ當山エ入院シテ法門初ナホドニ如何ヤウニモ思慮分別シテ説破ヲ  
求メ度ク在レ共、各ノ存知ノ透リ去年移ツテ初メテノ正月ニ依テ礼衆モ  
多フテ時キノ住持ナレバ卒度モ隙マガ無イホドニ説破ハ大衆ニ留與スト  
在ル事ヲ其ノ儘語ツテ立ツタ(『扶桑和尚再吟』四、五「青原鉤斧子」、四  
卷、一一丁裏)

(三) 野僧モ當年ノ口開ナ呈ニ第一舌ト説也(『鉄外和尚再吟』上、七「羅山  
開堂」)

こうした古則と行事との関係は代語集の伝統と連関するものである  
う。たとえば『天嶺代』では、天嶺吞甫が龍門寺・大中寺に入院いた  
時の代語が次のようにみられる。

類一帝王 閩王請羅山閑禪師開堂、師陞座方収歛僧伽黎乃云、珍重、  
竜門寺入院 便下座、閩王近前執師手云、靈山一会、何異今日、未審

以何賞開堂佳節、比量酬對機縁、弋、頭角軒昂峙雲霄奮  
迅高、詩学大成卅、龍ノ部二 (上、一五表)

類十一住山 鐵斧持來便住山、斫開南嶽好峰爰、夢、有這箇家風以曹  
大中寺入院 溪水脈翻五派山中再立一字、山門頭合掌、仏殿礼拝處作  
麼生委悉、弋、月隱青山瑞氣高、桐藏丹鳳觀無寥、拈頌  
集 (上、五〇表)

このうち大中寺入院の代語の本則は、『禪林類聚』の「青原鉤斧子」  
に対する仏国白(法雲惟白)の拈提頌である。したがってこの代語は  
「青原鉤斧子」の本則の拈提頌に対する拈提であつたのであり、こ  
うした形態は以前に指摘したように再吟の構造とも類似するものである。  
このように再吟文献にみられる一部の古則については、これが室町  
末期までの叢林行事との関係を有する代語集の伝統を引き継いでいた  
ことが知られるのである。

#### 六、『三百則抄』『本則抄』『禪林類聚撮要抄』等の

『禪林類聚』関係の抄と再吟文献との関係について

さて以上のごとく再吟文献が、法問という叢林の古則拈提行事を基  
盤として成立していたことについて検討したのであるが、このことか  
ら再び本則として引用された古則の問題、あるいは『禪林類聚』との  
問題について再び考えてみることにしたい。

すでに見たように、再吟文献における引用古則は『抜類聚』に依拠  
しながらも、さらに限られた古則が集中して引用されていた。こ  
うした固定的な本則の枠組みが存在するという事実は、これらの古則が法  
問のテーマであつたことを反映していると考えるべきであらう。今日

の法間は『従容録』百則の中から、法戦のテーマが選択されるのが慣例であり、専門僧堂以外の一般曹洞宗寺院の結制においては、ほぼ第一則「達磨廓然」に固定化されているのが現状である。しかるにこうした中世から近世初頭にかけての洞門では、こうした叢林における会下の接化において、法間は重要な役割を担っていたと考えられ、より多様な古則のテーマが用いられていたのである。しかしながらそのテーマはやはり叢林の教育的配慮からある程度固定された古則の枠組みの中から選択されていたのである。

ところで再吟文献が多く撰述されていた近世初頭『本則抄』『三百則抄』『禪林類聚撮要抄』といった文献がある。これらの内容は『禪林類聚』の中から主要な古則を取り上げてコンパクトに解説したものである。ちなみにこれらの典籍で扱われる本則を再吟文献と対比させてみると、再吟文献において取り扱われていたほとんどの古則が、この『本則抄』等における限定された本則の体系に吸収されることがわかる。

例えば『三百則抄』『本則抄』で扱われている本則を、先の『天南和尚再吟』を中心にした六再吟集の本則対照表（一〇―一五頁）にあてはめて調査してみると、『天南和尚再吟』の一六四則（重複を除くと一三則、以下同じ）の中、本則の上に○で示したごとく、一五二則（一〇一則）が『三百則抄』に取り上げられ、残りの一三則（一二則）においても、△で示した三則は『本則抄』に見出される古則であり、結局一五四則（一〇四則）がこの『三百則抄』『本則抄』の本則に見出されることがわかるのである。また二〇一「青原廬陵米」以下の三四則についても、この中三一則が『三百則抄』に見出せる。

ところで前出の対照表の本則で『三百則抄』『本則抄』に見出せない一三則についてみると、それらは各再吟集に頻出するものではなく、単発的に取り上げられたものが多いことから、再吟文献で本則として取り上げられる古則は、基本的には『三百則抄』『本則抄』といった『禪林類聚』所引の「本則抄類」（仮称）の枠組みの中にほぼ収まるといえるのではあるまいか。

このことは本則抄類の本則目録からみても、再吟の本則との密接な関係が予想されるであろう。紙面の都合で、『三百則抄』巻二、巻三のみを以下に示すことにする。（二八頁）

筆者はこれらの本則抄類は当時の法問全盛時における本則集とその解説（いわば問題集と解説集の性格を有するもの）ではなかったと考えている。

このうち『本則抄』『三百則抄』の場合は『禪林類聚』の古則と頌を解説しながらも、『禪林類聚』の基本的構成である第一巻の「帝王」から始まる古則分類の体系にはまったく無関心である。これは『禪林類聚』をソースとしながらも、ある意味で『禪林類聚』の抄の立場を離れたものであると判断できよう。

また『禪林類聚撮要抄』についても、これは『禪林類聚』の巻通りに注解されており、一応『禪林類聚』の抄としてみなせるのであるが、実はここで取り上げられた古則を見ると、『禪林類聚』から抜粋した『抜類聚』の古則の中からさらに、主要な古則に絞って注解しており、これは正確には『抜類聚』の抄でもない。その古則の目録を見る限り、再吟文献で扱われる古則と非常に類似しているのであり、やはりこの

『三百則抄』の本則目録

\*は前出の六再吟集(対照表I)に用いられた本則

卷二

- 1 \*石門家風拔類二 家風
- 2 大陽家風家風 拔類二
- 3 洞山過水悟道悟道 拔類一
- 4 打地棒搬掃 拔類四
- 5 \*廣額屠士佛祖 拔類一
- 6 本身盧舍那餅錫 拔類四
- 7 洛浦無心道人佛祖 拔類一
- 8 \*洞山無寒暑歲時 拔類三
- 9 \*德山未跨棒棒喝 拔類二
- 10 \*德山紙燭吹滅香灯 拔類四
- 11 \*青原鉏斧子住山 拔類三
- 12 \*五祖西來五字普灯 拔類二
- 13 \*閩王羅山開堂帝王 拔類一
- 14 \*玄沙指頭築破參學 拔類一
- 15 滙山方丈門掩却

- 16 \*馬祖即心即佛佛祖 拔類二
- 17 \*趙州無佛性貓犬 拔類四
- 18 佛來不著門戶 拔類一
- 19 \*道吾極則事餅錫 拔類四
- 20 六祖不會佛法祖教 拔類一
- 21 \*雲門點句示衆 拔類二
- 22 \*六祖風幡風雲 拔類三
- 23 \*水潦大悟祖教 拔類一
- 24 \*道吾女人拜禮拜 拔類三
- 25 \*趙州至道無難大道 拔類一
- 26 趙州不引盡
- 27 \*趙州分疎不下
- 28 趙州田庫奴
- 29 風穴通不犯花葉 拔類四
- 30 \*香嚴樹上草木 拔類四
- 31 南岳不污染參學 拔類三
- 32 \*楊岐三脚騙子佛祖 拔類一
- 33 \*擊竹悟道悟道 拔類一
- 34 \*藥山陞座說法 拔類一
- 35 \*鰲山成道悟道 拔類一
- 36 \*馬祖本來人心眼 拔類二

卷三

- 37 \*南泉鎌子器用 拔類四
- 38 \*百丈開田大義田地 拔類四
- 39 \*投子威音前一箭法屬 拔類二
- 40 \*黃檗六十棒棒喝 拔類二
- 41 \*臨濟入門喝棒喝 拔類二
- 42 \*盧陵米問法 拔類一
- 43 玄沙三白紙馳書 拔類三
- 1 \*三處相見殿堂 拔類一
- 2 \*慈明一盆水丈室 拔類一
- 3 \*臨濟賓主歷然頭音 拔類二
- 4 \*萬法不侶水火 拔類三
- 5 \*趙州婆子勸破尼女 拔類二
- 6 \*百丈野狐因果 拔類三
- 7 平常心是道大道 拔類一
- 8 \*洞山三頓棒解結 拔類三
- 9 \*百丈野鴨子飛走 拔類四
- 10 \*百丈捲席說法 拔類一
- 11 \*馬祖再參捉拂 拔類四
- 12 \*普化鈴鐸法器 拔類四

- 13 \*法眼惠超問佛佛祖 拔類一
- 14 百丈獨坐大雄峯住山 拔類三
- 15 \*無位真人人境 拔類二
- 16 \*透網金鱗龜魚 拔類四
- 17 \*世尊拈華花菓 拔類四
- 18 \*長慶遊山遊山 拔類三
- 19 \*首山竹篋搥拂 拔類四
- 20 \*雪峯鼈鼻蛇兔蛇 拔類四
- 21 \*翠岩眉毛解結 拔類三
- 22 \*六祖不思善不思惡
- 23 \*靈雲見桃花悟道花菓 拔類四
- 24 \*定上坐佇立問法 拔類一
- 25 \*趙州栢樹子祖教 拔類一
- 26 \*南泉斬猫猫犬 拔類四
- 27 \*迦葉刹竿衣鉢 拔類三
- 28 \*世尊外道問佛風雲 拔類三
- 29 \*俱胝一指庵居 拔類三
- 30 趙州洗鉢孟齋粥 拔類四
- 31 瑞岩主人公賓主 拔類二
- 32 德山托鉢下堂衣鉢 拔類三
- 33 \*國師三喚待者 拔類二

- 34 \*滙山淨餅踢倒知事 拔類二
- 35 \*馬祖不安問疾 拔類三
- 36 \*德山法堂背却殿堂 拔類一
- 37 \*雪峰粟米粒糧食 拔類四
- 38 \*趙州四門門戶 拔類一
- 39 \*南泉一圓相圓相 拔類二
- 40 \*世尊陞座說法 拔類一
- 41 \*鹽官犀牛扇子鏡扇 拔類四
- 42 \*鳥巢布毛待者 拔類二
- 43 \*趙州布衫問法 拔類一

典籍も、法問を前提にして成立した文献であると考えてよからう。

さらに再吟とこれらの『禪林類聚』を基盤にした本則抄類との関係を示す上で筆者が注目する典籍として大中寺所蔵の本則抄がある。

この典籍は外題も内題もみえず、最初の目録によると一七九の古則について注解した典籍であるが、本書には雪庭春積（東竹院四世 寛永四年寂）の注解と推定される駒澤大學図書館蔵の『本則抄』（百則の拈提）と一致するところもあり、春積の名も散見される。ちなみに両者に共通（類似）する古則と拈提は、例えば駒澤大学本の一「竇頭盧尊者眉毛撥開」は大中寺本の第二七則、二の「東印土国王般若多羅轉經」は第一〇則、三の「広額屠兒」は第三三則に対応するものの、古則の順は一致せず、また全体的に概観してみても両者は共通でない部分も多い。尚、駒澤大学本の『本則抄』に見られる春積についてであるが、大中寺本では「春積先ツ本則注ニ云」（『外道問佛頌批判』、六〇丁、表）、「○春積著語云」（『馬祖不安』、一〇七丁表）、「春積有著語云」（『俱胝一指』、一二七丁表）といった記述が見い出せる。

この大中寺蔵本の「本則抄」の一七九則は、駒澤大学蔵本の百則と同様、再吟類に多用される古則が取り扱われており、両者の関係については今後より細かい調査が必要となるであろう。

ところでこの大中寺蔵本「本則抄」の最後の方の一三八則と一四一則には次のような天南松薫の説破が見い出すことができる。

（一）天南破云、今朝踢倒の脚跟ヨリ吹き起タ風声推シ上ゲタ雲勢イラ見ルニ後日ノコトガ推量セラレタゾ、乍去兜率悦ハ不一流頂門ノ痛

ミニ何ント走（『瀉山浄瓶踢倒』、一四〇丁、表―裏）

（二）天南破云、好看虎頭ノ商量モ御代廃テノ沙汰デ在郎ズ、雪竇ノ顯

ハ快ニ両袖ヲ翻エシテ鼓冬々哆囀哩囀哩囀（一四二丁表）

実はこの記述を『天南和尚再吟』の中に確認してみると、「一一〇 瀉山浄瓶踢倒」、「八八 桐峰庵主虎聲」の古則に対する説破としてそれぞれ見い出せるのであり、この「本則抄」の撰述者が『天南和尚再吟』を参照し、ながらその注解に反映させていることがわかるのである。

筆者はこうしたことから、この「本則抄」のような『禪林類聚』の抄は単なる『禪林類聚』の抄的資料ではなく、再吟文献との繋がりを予想させる資料として位置づけられるのでは、と考えるのである。つまりこうした典籍は『禪林類聚』の注釈という撰述目的からではなく、前述の如くこれらの本則をテーマにした法戦・法問が盛行していた時代の要求にもとづいて成立したものではないか、と推察するのである。以上の如く法問が前提となつて成立したのが、これらの再吟文献であり、また一方において『三百則抄』『本則抄』『禪林類聚撮要抄』といった『禪林類聚』（ただし『抜類聚』）所引の本則注解書が成立していったということが理解されるであろう。

#### 七、再吟文献と門参類について

最後に再吟に本則として扱われる古則について、付言すべき点は、室内にて参究される公案門参の目録類の中に、この『禪林類聚』や再吟で扱われた一群の古則が重なっているものが見い出せるという点である。

例えば香林寺蔵の「天嶺御目録之次第」（典籍七二）には古則が列挙

され、それぞれ著語が示されるが、今その古則リストを見るならば、再吟文献に用いられていた古則をそこに多く見い出すことができる。

(先の再吟の対照表に見られる古則については\*印を付した。)

*世尊拈花	*無位真人	*趙州三喫茶	*萬法不侶
*未跨棒	*趙州露刀劍	*南泉斬猫	*趙州石橋
*夾山境	*藥山陞座	*香林遠	*雲門透法身
*南泉—鎌子	*鼈鼻蛇	*瀧山鐵磨問答	*西院問答
*雲門点句	*六祖風幡	長沙岑大蟲	*雪峰住庵
身心脱落	*八十翁々	文遠問答	*船子夾山
*十身調御	*趙州四門	*雲門話墮	*有句無句
*鳥窠布毛	二庵主拳頭	仰山椅子話	*庭前栢樹子

〈以下省略〉

また同寺所蔵の「大中寺快庵一派之目録」(典籍五九)でも、

○洞家濟夜半透

\*世尊拈花

\*六十棒

\*佇立大悟

\*水潦大悟

\*竹篋背觸

雲門當頭一句

\*玄沙指頭築破

\*南泉斬猫

\*雪峰三木毬

六祖不階級

\*寶主歷然

\*見明星悟道

\*見桃花悟道

\*鰲山成道

南泉趙州家

法眼宗

以上十八則

○\*馬祖再參透

\*南泉一圓相

\*香巖樹上

大才拙戸

\*南泉斬猫

大随一點茶

\*仰山半月相

\*水潦大悟

青原一足垂下

\*普化鈴鐸

十則共二首古則也

○南院啐啄機

\*林才松栽

\*鳥白二上座

室内一盞灯

\*上定坐佇立

五則也

このように再吟文献と門參とは、少なくとも取り扱う古則について、かなり共通のものを有していたことが知られるであろう。

中世曹洞宗典籍の中、代語文献では『禪林類聚』や『碧巖録』など重要な位置を占めていたことには間違いないが、一方において『嘉泰普燈錄』や詩文集など、公案集以外の出典も多く、また時には古則に基づかず和尚自身の垂示をなして代語する場合もあり、公案拈提集として一貫しているわけではない。これに対し再吟文献は古則公案の拈提であり、会下に対する公開的な説示としては代語集に近いものの、上述のごとく内容的には門參と重なる古則を多く扱っており、いわば再吟文献は室内で扱われる古則と密接であることが知られているのである。総じていうならば再吟文献は代語文献と門參との中間に位置する文献群であるといえるのではなからうか。

#### まとめにかえて——再吟文献の成立について

ところで最初に述べたように、再吟文献は、中世洞門資料として位置づけられるものの、実はほとんどが近世初頭に撰述されたものばかりである。こうした事実が再吟の古則拈提の特殊な形態とあいまって、中世洞門抄物の中でも、その位置づけも問題となるところである。しかしながらこうした問題について筆者は、近世初頭に突如としてその独特な古則拈提形式が成立して、再吟なる文献が成立したわけではないと考える。前述したように再吟はあくまで叢林行事としての法問を前提とするものであり、江湖会中の法問についても『勝国和尚再吟』にも具体的な龍州の法問の様子などが伝えられ、また十五世紀後半に

さかのぼると思われる大安寺の『回向并式法』といった文献に「法問始め」の具体的な記述があり、またこうした古則説破の伝統は室町期の双林寺の十人老僧まで遡ることができるのである。

このように確かに叢林行事としての法問あるいは古則の説破は室町後期から行われていたのであるが、写本や刊本として伝えられる文献としては近世初頭のものばかりであって、室町後期のものはほとんど見い出ず、たとえば前出の如く龍州の法問の事例が伝えられながら龍州をはじめとする室町後期の洞門僧の再吟は著作としてはほとんど伝わっていない。これはいったい如何なる所以なのであろうか。これは中世洞門僧においては、語録としての代語集は残すが、時々法問における説破については正式な語録としての認識がなかったのではないか。前述のごとく法問の伝統は、古則についての自由な商量を通じて互いに切磋琢磨することであつたはずであり、説破自体も首座や大衆がおこなっていたものである。しかしながらこうした法問における説破の形式が固定化し、このうち主人たる住持の模範的な説破、特に本則提唱としての一定の形式が中世末期から近世にかけての間に確立されて、再吟という一群の典籍として編集され、また刊本としても公開されるようになったのではなからうか。この点についてはさらに検討すべき余地があるので、今後とも検討を加えてみることにしたい。

※「再吟」といっても、例えば『大淵和尚再吟』という場合と、再吟文献中にしばしば登場する「再吟ハ…」という場合とは、明らかにその意味する範囲が異なるのであり、以前に考察した「代語」の場合と同じく、

「再吟」には内容的に広狭の差が見出すことができる。このうち最も狭義の範囲で用いられるものは、文中に「再吟ハ…」として用いられる場合で、これは後述するように本則・頌古に続く説破の部分に限定して指示する「再吟」である。しかし説破だけでは、古則拈提形式としては完結ではない。やはり本則・頌古・説破、そして抄をも付随させた形が、個々の再吟の一般的形態であり、これが一つの古則に対する「再吟」としての拈提の一単位となるであろう。そしてこうした個々の再吟を集成したもののが、『大淵和尚再吟』のような一撰述書、再吟集としての「再吟」であり、またこうした一群の再吟集全体を指し示す場合も「再吟」といわれるのである。そこで本稿では、「再吟」として用いられているさまざまな内容を、(1)説破(2)最も狭義の再吟、(3)再吟(4)一つの本則に対する再吟形式による拈提、(5)再吟集(6)再吟を集成した各和尚の撰述書、(7)再吟文献(8)再吟集の集合全体、といった四つに区別して用いることにしたい。

#### 注記

- (1) 再吟研究論文リストの七の樋渡登氏による論稿、一二六頁参照。
- (2) これまで石川力山氏による洞門抄物の分類において再吟が洞門抄物の形態的な視点から、代語抄と同類のグループに位置づけられていることも注意されるべきであろう。また再吟について「再吟は代語抄を対してさらに注釈を加えたもの」と位置づけられている。
- (3) 金田弘氏、前掲論文二、鏡島元隆氏、前掲論文三を参照。
- (4) 樋渡登氏は『大淵和尚再吟』の「1、本則 2、偈頌 3、破云(抄

文) 4、引句(漢詩文・古歌など) 5、私云、心ハ 6、頌ハ 7、

再吟」の形式と『鉄外和尚再吟』の「1、本則 2、偈頌 3、破云

(抄文) 4、引句(漢詩文・古歌など) 5、私云、心ハ 6、頌ハ

7、再吟」の形式との二種類を提示されている。また同時に大淵・鉄外によるそれぞれの代語抄とも比較検討されている。(前掲論文七)

- (5) 『大淵和尚再吟』上、一三「雲門体露金風」のように本則・頌古・説破の後の抄が、口、説破の抄・イ、本則の抄・ハ、頌古の抄という順序になっている例外的な場合(「I類」の変形)もある。

- (6) 「説破」の語義については、樋渡登氏の前掲論文七に詳しい。

- (7) ただし『大淵和尚再吟』下、二九「水牯牛」は頌古が存在せず、特異な例となっている。

- (8) 『大淵和尚再吟』中、一「臨濟無位真人」(三番目の説破)

- (9) 再吟類における『禅林類聚』の引用する際には目次等において巻数も示されることがあるが、二十冊本も四冊本も同じ項目が同じ巻に配置されており、どちらの『禅林類聚』に基づいているかは、そのままでは即断できない。尚鉄外吞齋は各巻頭の古則目録において四冊本の冊数を記している。

- (10) 『天南和尚再吟』第八八則、『鉄外和尚再吟』下二〇に依用される「桐峰庵主虎声」巻第二〇竜虎部は二〇冊本『類聚』にしか存在しない。

- (11) 勝国は巨海十三回忌の法問を行っており(『勝国和尚再吟』巻三)、大淵や鉄外も仏事法問をなしている。(『大淵和尚再吟』上、一三「雲門体露金風」・『鉄外和尚再吟』下)また勝国良尊は江戸城において徳川家康の前で御前法問を行っている。(『勝国和尚再吟』巻一) 樋渡登

氏、前掲論文七、参照。

- (12) 尚、今日においても首座が法幢師に正月に寿餅を伝統が宗門に残されているが、おそらくはこの「法門餅」から発しているのではなかろうか。

- (13) この他にも、「當則ハ快庵派デハ古則始メに云ハスル時ハ相續ダ」『鉄外和尚再吟』下、一五「保壽開堂」などの記述が注意される。